

中山道 69 次ウォーキング 17 日目

醒井-4.3K-番場-5.4K-鳥居本-6.4Km-高宮-7.4Km-愛知川 -11.1Km-武佐

10 月 15 日、前回到達地点の醒ヶ井駅に到着、8 時 30 分より歩き始め、天気予報は晴れ時々曇り。

### 一類狐魂等衆碑

醒ヶ井のはずれに「一類狐魂等衆碑」石碑があり、その横に

江戸時代後期のある日、東の見附の石垣にもたれて、1 人の旅の老人が、「母親の乳がのみたい・・・」とつぶやいていた。人々は相手にしなかったが、乳飲み子を抱いた 1 人の母親が気の毒に思い「私の乳でよかったら」と、自分の乳房をふくませてやりました。老人は、二口三口おいしそうに飲むと、目に涙を浮かべ「有り難うございました、本当の母親に会えたような気がします。懐に 70 両の金があるので、貴女に差し上げます」と言い終わると、母親に抱かれて眠る子のように、安らかに往生をとげました。この母親は、お金は頂くことは出来ない、老人が埋葬された墓地の傍らに、「一類狐魂等衆」の碑を建て、供養したと伝える。

### 一類狐魂等衆碑



と書かれている。「一類狐魂等衆」の意味が分からず調べたが不明。「孤独な魂もみんなの魂と同じ」のように思うが。

### 番場(ばんば)宿 62 番目



仏旗

1 時間程で 62 番目の番場宿に到着。本陣・脇本陣等の宿場遺構は何もないが、街道の両側の家々に派手な旗が揚がっており、何の旗かと聞くと宿場にある蓮華寺の xx 年法要があるため、この旗は仏旗と云うとのこと。へえー、蓮華寺は寺用の旗を持っているのかと興味を覚えて調べたら、この仏旗は国際仏旗として定められた世界共通の仏教の旗で 6 色仏旗とも呼ばれ、各色は仏教の教えを表している。

浅学が恥ずかしい。

因みに六色とは「仏陀がそのすぐれた力をはたらかせる時、仏陀の体から放たれる青、黄、赤、白、樺及び輝きの六色」。



街道の家々に揚げられた仏旗

### 蓮華寺 北条仲時と番場の忠太郎

その蓮華寺を見学、入山料 300 円也、南北朝時代の北朝の六波羅探題北条仲時はこの寺で南朝方に包囲されて一族郎党 430 余名は自刃し、その墓がある。また、長谷川伸の戯曲「臉の母」は当地が舞台で、その主人公の「番場の忠太郎」の地蔵があった。長谷川伸の名と番場の忠太郎の名は知っているが、芝居を見たことも戯曲を読んだこともない。当寺の住職は斎藤茂吉の友人だったとのことで、斎藤茂吉の歌碑があり、そこに「歌聖」と書かれていた。歌聖は言い過ぎ?

番場の忠太郎地蔵



斎藤茂吉歌碑



松風の音聞くときは古への  
聖の如く我は寂しむ 斎藤茂吉

### 磨針(すりはり)峠と望湖堂

次の宿場との間の峠は標高 154m 磨針(すりはり)峠、由来は

その昔、諸国を修行して歩いていた青年僧が、挫折しそうになってこの峠を通りかかった時、斧で石を摺(す)っている老婆に出会います。聞くと、一本きりの大切な針を折ってしまったので、斧をこうして磨いて針にするといいます。そのとき、ハッと、「この老婆の苦勞に比べたら自分の修行はまだ甘かった」と、自分の未熟を恥じ、心を入れ替えて修行したのちに弘法大師になった、という伝説から「磨針峠」の名はきています。その後、再びこの峠を訪れた大師は、明神に栃餅を供え、杉の若木を植えて、「道はなほ学ぶることの難(かた)からむ 斧を針とせし人もこそあれ」という一首を詠んだと伝えられています。

峠から琵琶湖の湖面が見えるものの霞んで写真ではうまく撮影できない。江戸時代にはここに望湖堂なる茶屋があり、旅人はここで琵琶湖を眺めて一服し、茶屋は繁盛した。

### 鳥居本宿 63 番目

磨針峠までの舗装道路は一変して細い山道となり、下り坂を一気に下るとそこは彦根市、「おいでやす彦根」の碑があり、鳥居本宿となる。

おいでやす彦根の碑





## 薬屋と合羽屋

赤玉神教丸の有川家



宿の入口にある豪壮な旧家は「赤玉神教丸」なる健胃薬の販売元で今も販売している有川家、その先の軒先に道中合羽の看板を吊り下げているのは木綿屋で、合羽をデフォルメした看板が面白い。和紙に柿渋の防水処理をした道中合羽はもちろん今は販売していない。もう一軒の合羽屋の松屋は屋根の上に看板を上げており、本来の看板はこのように屋根の上にあるものだった。

木綿屋の看板



松屋



鳥居本宿には本陣・脇本陣は残っていないが商家などの旧家は沢山残っており、商人の力が強かったことを偲ばせる。

## 小町塚

鳥居本宿の外れの小野集落に小野小町の小町塚があり、小町地蔵を祀ったお堂がある。自然石の正面と両側面に仏を彫った珍しいものらしいが、お堂の格子の隙間から見ると、地蔵は長い年月で目鼻のない石と化していた。説明板には「出羽郡小野美実（好美）は、奥州に下る途中に、小野に一夜の宿を求め、ここで生後間もない可愛い女兒に出会った。

小野町太鼓踊り



美実はこの女兒を養女に

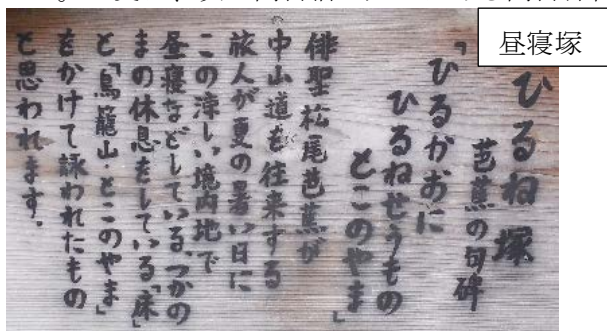
もらい受け、出羽国へ連れて行った。この女兒が小町という」と書かれており、「小野町太鼓踊り」の中には、小野小町が謡われているとのこと。地蔵堂の横の石碑にはその「小野町太鼓踊り」の絵が彫られており、「小野小町にはたおりさせば あやしやにしきの姫ばたを」とある。

小町地蔵



昼寝塚と芭蕉句碑

原八幡神社に芭蕉の句碑があるとの案内があり、寄道すると、昼寝塚・白髭塚があつて石碑がいくつかあるものの、いずれも摩耗して字は読めず、どれが芭蕉だか分からなかった。更に、次の高宮宿の入口にある高宮神社にも芭蕉の句碑があるとのことで寄道。



昼寝塚



高宮神社の句碑

をりをりに  
伊吹を見てや  
冬籠り 芭蕉

高宮宿 64 番目



一の鳥居

高宮宿は滋賀県第一の神社である多賀大社の門前町としても賑わった町で、多賀大社一の鳥居があり、石作り高さ 11m、柱間 8m、1635 年製の大きなもの。鳥居本宿もかつては多賀大社の鳥居があつて地名となった。本陣は門のみで、宿場の遺構はないものの、旧家は多い。宿駅 座・楽庵と書かれた旧家の休憩所があり、立ち寄ると、この付近の産物であつた高宮上布(麻布)の蔵のあとだつた。また、「提灯屋」が現役で商売しており、見て楽しくなる色んな提灯を展示していた。



提灯屋のショーウィンドー



座・楽庵

紙子塚

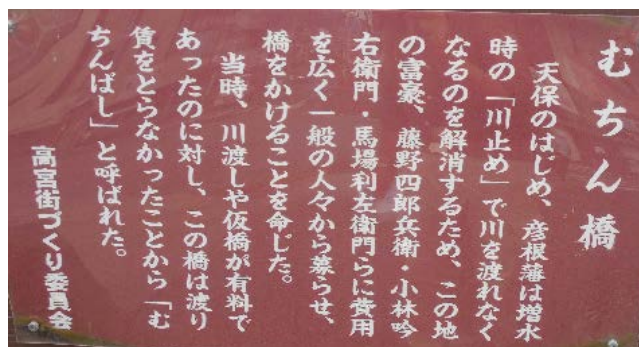
旧家の前に紙子塚と書かれており、興味を覚えて立ち寄ると右の説明があつた。鳥居本で紙の合羽を見たが、紙の羽織もあつたのだ。

芭蕉の紙子塚  
たのむぞよ  
寝酒なき夜の古紙子  
貞享元年(1684)の冬、  
縁あつて小林家三代の許して  
一泊した芭蕉は、自分が横にな  
つてゐる姿の絵を描いてこの句  
を詠んだ。紙子とは紙で作つた  
衣服のことで、小林家は新しい  
紙子羽織を芭蕉に贈り、その後  
庭に塚を作り古い紙子を収めて  
「紙子塚」と名づけた。  
高宮街へ行く委員会



## むちん橋

高宮宿の外れにあるのがむちん橋、町人が寄付を募って橋を作り、有料が普通だった通行料をタダとした。行政を預かる彦根藩はこれを善政と考えたのだろうか、無能の証拠とは考えなかったのか。



## 伊藤忠兵衛と江州音頭

近江は近江商人で有名、その代表格は伊藤忠(現丸紅)の創始者の伊藤忠兵衛で生家は保存されており無料で見学可能。確かに、鳥居本宿/高宮宿と商人の力を感じさせる大きな旧家が多い。

伊藤忠兵衛生家



州音頭発祥地



また江州音頭の発祥地とのことでその記念碑があり、聞けるようになっていたが、耳に馴染みがないのでパス。

## 歌詰橋

愛知川宿の手前の宇曾川にあるのが歌詰橋、下記はその謂れ。

平将門は、藤原秀郷によって東国で殺され首級をあげられた。秀郷が京に上るために、中山道のこの橋まで来たとき、目を開いた将門の首が追いかけてきたため、将門の首に対して歌を一首といい、いわれた将門の首はその歌に詰まり、橋上に落ちた。そこがこの土橋であったとの伝説がある。以来、村人はこの橋を歌詰橋と呼ぶようになった

「東国の荒くれ武者は教養が無く、歌の一首も読めない」と馬鹿にしたような謂れだが、歌を一首と言われて思わず考え込んでしまう首を想像してしまう、ユーモラス。因みに、宇曾川は舟運が盛んで運槽川と呼ばれたがしだいになまって宇曾川となった。

## 愛知川(えちがわ)宿 65 番目

宿場の遺構は何も残っていないが、名だたる近江商人の出身地、旧家が多い、宝暦八年(1758)創業の料亭や、文政 11 年(1828)創業の醤油屋がある。宿場の西にある愛知川橋にも「むちん橋」があり、高宮宿のはずれの「むちん橋」と同様に町人が寄付を集めて橋を作り、通行料をタダにしたとある。近江商人の力が強かったのか、藩の力が弱かったのか。

愛知川宿の旧家



老蘇(おいそ)の森と奥石(おいそ)神社



愛知川宿と次の武佐宿の間は 11Km、愛知川宿の外れで 16 時前、日没までに武佐駅に着きたいと早足で歩き、17 時頃に水田の向こうに黒々とした老蘇の森が見え、奥石神社の鳥居の前に到着。

老蘇の森は、国史跡・国名勝に指定されており、万葉の昔から多くの歌人や旅人によって歌に詠まれ「歌枕」としても名高い森とのこと。その老蘇の森の中にあるのが奥石神社。

昔この一帯は地裂け水湧いて とても人の住める土地ではなかったが、今から約 2300 年前 孝霊天皇の御世に石辺大連 (いしべのおおむらじ) という人が神の助けを得て松、杉、檜などの苗木を植え 祈願したところ、たちまち生い茂り大森林になったと伝えられている。そして、この石辺大連は齢百数十を数えても、なお矍鑠として壮年を凌ぐほどであったので、人呼んで「老蘇」(老が蘇る) と言い、この森を「老蘇の森」と呼ぶようになった

武佐(むさ)宿 66 番目



日没が迫りつつあり、街道筋の家々の軒先の小さな吊り灯籠が灯り、情緒がある。武佐宿には本陣・脇本陣は残っていない

ものの今も旅館として営業している創業 400 年の旅籠中村屋があり、旧家も多い。

創業 400 年の旅籠  
中村屋





### 特徴のある屋根

旧家が多い中で、新築も含め瓦葺の2階建ての家に特徴があるのに気がついた。多くの家の1階部分の屋根の瓦の付け根部分(どう呼ぶのか分からないが)に白い漆喰が3列塗られ、強いアクセントとなっている。



### 泡子延命地蔵

泡子延命地蔵の遺跡の碑がある。

昔、この地に村井藤齋という者が茶店を構え、妹が茶を出して旅人を休ませていた。ある日一人の僧がこの茶店で休憩したところ、妹は直ぐに大変深くこの僧に恋をした。そして僧が立ち去ると、僧の飲み残した茶を飲んだ。すると不思議やたちどころにして懐妊し、男の子を産み落とした。それから3年して、その子を抱いて川で大根を洗っていると僧が現われて、不思議なるかなその子の泣き声がお経を読んでいるように聞こえると云う。振り向いてその僧を眺めると3年前に恋した僧であった。妹が前年の話をすると、その僧が男の子にフッと息を吹きかけた途端、泡となり消えてしまったと云う。僧が云うに、西の方にある「あら井」という所の池の中に貴き地蔵がありこの子のためにお堂を建て安置せよ。

泡子延命地蔵



醒ヶ井宿の西行水も同じ伝説で、違いは僧が西行であること、一体何を意味するのか?

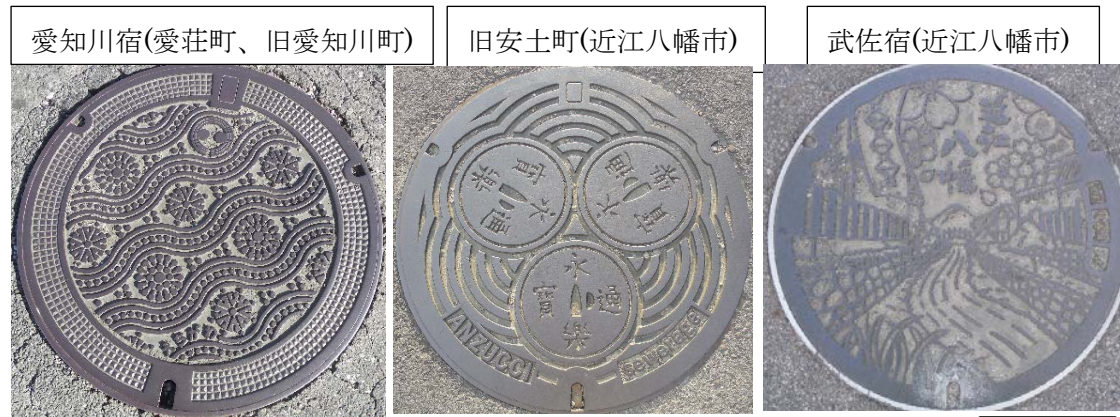
18 時頃に近江鉄道武佐駅に到着、既に太陽は没し、夕闇が濃くなっている。近江八幡で JR に乗り換え、京都経由で帰途、本日は 6.1 万歩。足指のテーピングを忘れ、豆をこしらえてしまった。やはり 30Km を越えるとテーピングは必須。

マンホールの蓋

番場宿は醒ヶ井宿と同じで省略。 鳥居本宿は大小の★と六角形は市章、周りの市花橘、因みに井伊家の家紋が彦根橘。 高宮宿の中央は町章、江州音頭を踊る人、町花ツツジ、提灯。高宮宿で見かけたもう一つは滋賀県、県は珍しく県鳥カイツブリと琵琶湖とヨット。



愛知川宿は河川と花火、愛知川と武佐の中間の旧安土町は永楽通宝で安土城の信長の家紋、ANZUCCI は、当時の宣教師達が安土をそう表記した。武佐宿は八幡堀の両側に白壁の蔵と八幡山。 そろばん玉の暖簾と市の木サクラ。



17日目

